

タイトル：令和1（2019）年度 研究セミナー（第20回）

日時：2019年12月21日（土）～22日（日）

場所：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 3階マルチメディアセミナー室(306)

「スンナ派文献によってアリー崇敬を論じるシーア派学者:イブン・ビトリーク・ヒッリーと美質の書『支え』の編纂」

水上 遼（東京大学大学院人文社会系研究科 博士課程）

私は今回、現在博士論文の構想を固め、各章にあたる内容を個別の論文にしようとしている段階で参加させていただいた。博士論文では「美質の書」と呼ばれる文献ジャンルを主要な史料としているが、先行研究で史料としてはあまり利用されてこなかったものであるため、自分の研究にどのように用いれば説得力ある内容にできるか、常に不安を抱いていた。報告を行い、様々な分野・地域を専門とする先生方から貴重なコメント・ご批判をいただいたことで、現在の研究内容に欠けていることが何かを知ることができ、「美質の書」の扱い方についても考えを深めることができた。

また、個別の研究報告だけでなく、博士論文の全体像についても扱う機会をいただけたことは、準備段階で章立てや議論の筋道について再考する良い機会となった。短い時間しか与えられない学会発表ではできないような、大きな構想とその中での具体的な議論を同時にできる場は貴重であったと思う。

他の博士課程の大学院生の報告を聞く機会があったことも新鮮で、自分にとって良い刺激になった。扱う地域や時代、ディスイプリンは全く異なるが、史料の使い方や議論の説得力の持たせ方などは大いに参考になり、自分の研究方法を相対化することもできた。

最後に、池田昭光さんに「私の博士論文」というタイトルで博士号取得や博士論文の出版までの経緯やその中での苦労を語っていただいたことは非常にありがたく感じた。特に調査で思うような成果が得られなかったことや、非常勤講師と博士論文執筆を並行することの難しさ、ご自身の博士論文の内容への不満などの率直な話は、今自分自身が抱えている不安と重なるところが大きかった。自分の思ったとおりの情報が資料から得られないときに、「文献にある言葉をもっと大事にしてはどうか」とアドバイスをされているのがとても印象的だった。自分の興味・関心だけで文献を読むのではなく、文献それ自体の語っていることが何なのかを注視する、というのは、研究で行き詰りそうになったときに繰り返し思い出したいと思った。

セミナーを通じて、先生方や他の参加者と議論・交流でき、とても有意義な二日間を過ごすことができた。セミナーでいただいたアドバイスを生かしつつ、よりよい博士論文を作り上げていきたいと思う。